

經濟研究

第 3 號

July 1950

Vol. 1 No. 3

經濟的測定の本質

杉 本 榮 一

- I 測定可能の經濟量と統計數値
- II 測定對象と測定裝置
- III 理論經濟學と計量經濟學
- IV 經濟的測定の實踐的性格

I 測定可能の經濟量と統計數値

現代の經濟社會が、貨幣を價值測定的手段として計量される量的な側面をもつことは、誰人も否定し得ない事實である。したがってこのような側面をもつ經濟社會の運動を研究對象とする經濟理論が、その著しい部分において嚴格に數學的な性格をもつことは明かであり、しかも經濟學が對象とする人間の社會は、自然科學が對象とする自然にくらべ、比較を絶するほど複雑な構造をもつものである以上、理論經濟學の驅使する數學が極めて複雑なものとなることも見易い道理であって、最近の理論經濟學がいよいよますます高度の數學的表現を伴う傾向があることは、ある意味において、經濟學の進歩に伴う當然の結果であるといつてよいであろう。

しかし經濟學は、あくまで經濟學であって數學ではない。經濟學の對象は先驗的な数理の世界ではなくて、經驗的な經濟生活そのものであることはもとよりであるから、經濟學において取扱われる數量は、あくまで經驗的に測定可能な數量でな

ければならず、經濟理論の中に現われる數學的表現も、あくまで經驗的にとらえることのできる經濟關係の表示でなければならぬことは、理の當然であろう。パレートの『選擇の理論』¹⁾が数理經濟學史上においても劃期的な意義も、このような嚴密に經驗科學的な用意の下に『一般均衡理論』を再構成したところにあつたのである。すなわちパレートは、ワルラスが經驗的に測定することのできない主觀的な『效用』の概念から出發して、その經濟學の理論體系を打ちたてたことに反對して、經驗的に測定することのできない主觀的な效用を基礎とするかぎり、經濟學は一個の形而上學に墮せざるを得ないと斷定し、經驗科學としての經濟學は、あくまで經驗的に測定可能な客觀的な經濟量の關係だけを問題とすべきである、と考へた。そしてかれは、經驗的に客觀的に測定することのできる物量と物量との間の個人經濟的な選擇關係を示す『無差別系列組織』と、同じく經

1) V. Pareto: Manuale di economia politica. 1906. 参照。なお詳しくは、拙著『理論經濟學の基本性格』1949年、10~20頁参照。

驗的に客觀的に測定することのできる數量關係としての市場價格の體系と、經驗的に客觀的に與えられた商品の初期所有量という、純粹に經驗的に測定可能な諸々の數量關係だけから出發して、個別經濟的な一般均衡の數學的な理論に到達し、さてそのうえで、市場價格の自動調節機能を働かせることによって、數學的に市場經濟的な一般均衡の理論を演繹したのであった。

この場合パレートが、個別經濟的な一般均衡——消費者の家計均衡および生産者の經營均衡——の關係から、直ちにその總計として、社會經濟的な一般均衡の關係を導いたことについては、對象とする經濟社會の構造が、等質的であるかまたは異質的であるかという、經驗的な事實に徴して、なお詳細に吟味すべき點が残っているのであるが、²⁾ ここでわれわれが近代經驗科學の立場からみて、パレートの劃期的な功績としてまず確認しておきたいことは、かれがあくまでも近代的な實證主義の精神をつらぬいて、經驗的に測定可能な量——とかれが考えたところのもの——だけから出發しようとした、純粹に經驗科學的な態度であった。パレート以後の後期ローザンヌ學派の經濟學は、まさにこのパレートの實證主義の精神を追及しつつあるものであって、われわれがローザンヌ學派流の一般均衡理論に對して多くの批判をもちながら、なおわが學界がとかく無批判的に限界效用理論へ後退することの危険を警戒して、パレートの實證主義の精神を強調する理由も、またここにあるのである。

そこで問題は進む。しからばここで經驗的に測定可能な量だけから出發するということは、果してどういう意味であろうか。ここで經驗的に測定可能な量というところのものと、現實に經驗的に測定された統計數値との間には、理論上如何なる關係があるのであるか。現代經濟學が經驗的に測定可能な量として考えている經濟諸量のうちでも、とりわけ經濟學がその解明の任務を負わされている量としての價格は、如何にして測定されるものであるか。現實の價格を經驗的に測定した

成果である、と常識的に受取られている價格統計上の具體的な數値と、經驗科學としての理論經濟學が取扱う理論上の抽象的な數量としての價格とは、どのような關係をもつのであろうか。

あたかも物理學で、物理學者が觀測しようがすまいが、それとは獨立に存在する客觀的絶對的な、しかし觀測可能な自然の世界があるものと考え、この客觀的絶對的な自然の觀測可能な數量關係を、理性によって抽象的に定式化するのが、理論物理學の任務であり、これを觀測および實驗の結果によって具體的に檢證するのが、實驗物理學の任務である、と考える一部の物理學者の考え方に照應して、經濟學の分野においても、經濟學者が觀測しようがすまいが、それとは獨立に存在する客觀的絶對的な、しかし觀測可能な經濟の世界があつて、これを理性によって抽象的に定式化するのが、理論經濟學の任務であり、これを現實に觀測して得た統計によって具體的に檢證するのが、計量經濟學の任務である、と考える考え方がある。このような考え方にしたがって當面の問題を整理してみれば、次の如くとなるであろう。交換をしている多數の個人の社會的總實踐において決定される諸價格の、客觀的絶對的な運動があつて、これを經濟學者が外から眺めている。そしてもしかれが、この價格運動を理性によって定式化すれば、抽象的な價格の法則が得られ、この同じ運動を統計調査によって測定すれば、具體的な價格統計が得られる。しかも右に述べた抽象的な價格法則も具體的な價格統計も、ともに同じ客觀的絶對的な價格運動を對象として得られたものであるから、その兩者は當然に相符合し、價格法則は價格統計によって檢證されたことになる、というわけであろう。

Ⅱ 測定對象と測定装置

このような考え方にしたがって、經濟學者が行う價格の測定という操作を、具體的にスケッチしてみると、そのもっとも簡単なプロセスは、次の如くとなるであろう。まず現實の價格決定の過程について實際に調査する統計調査者があつて、例えば日本銀行調査局發行の『東京物價調』のような統計表が作成される。この統計表を基礎にして、

2) 拙著『理論經濟學の基本問題』1939年、154頁以下参照。

研究室内の經濟學者が價格指數を算出し、時系列としてグラフに圖示してみる。かれはその時系列を基礎として、簡単に、價格が一定の期間にわたり騰貴したか下落したか、あるいはどのようなジグザク・コースをたどって上下運動をしているか、またその程度は如何というようなことを、確定することができるであろう。さらにこれに数理統計學的な解析を施して、一般趨勢や季節的變動指數や循環運動を示す不規則的な曲線を計算したりして、特殊な波動運動を純粹に測定することも、現在相當な程度にまで行われており、³⁾ また將來時系列解析の方法が進歩すれば、今日よりもっと正確に價格運動を測定することができるようになるであろう。⁴⁾ この場合、經濟學者の價格測定の對象は、間接には現實の價格決定機構そのものであるが、直接にはこれを如實に表現していると考えられる物價表であり、測定の装置は研究室内の統計計算係および統計機械であろう。

しかし問題は、この場合經濟學者が直接の測定對象としている價格表の原資料が、どのようにして得られるかということである。經濟學者は、日銀がすでに價格調査という形で統計資料を發表しているからこそ、價格指數の解析を行い、價格騰落の程度を測定することができるのであるから、かれは價格の觀測を行うにあたり、日銀調査局をいわば測定装置として利用しているわけである。すなわちかれは、日銀調査局から始まり研究室内の計算係までを含む、一連の價格測定装置を用いて、價格の騰落を觀測しているのであって、この場合、この測定装置を使って測定する對象は、市場におけるすべての賣手および買手が行う交換行爲の合成果として發生する、市場價格の巨視的運動である。

しかし問題をさらに立入って考えるならば、次の如くにも考えられるであろう。日本銀行がその價格統計を作成するためには、價格の運動に關する生の資料が必要なのであるが、それは特定の商社に日々の價格を報告させたその報告である。したがってこの場合、價格測定装置の先端には、さらに實際の價格を報告する商社があるといつてもよいであろう。しかもこれらの商社は、實際に賣買行爲を行っている無数の人間の行爲の結果をみているわけであるから、つきつめていけば、このような無数の人間の微視的な交換行爲が、やはり測定装置の先端に含まれている、といつてもよい。すなわち交換行爲を行っている個々の人間から始まって、價格報告を行う商社や日銀調査局を経て、研究室内の計算機構までを含む、一連の大きな價格測定機構があつて、このような價格測定機構をいわば測定装置として、個々の交換者の個別的交換行爲に關係する微視的な價格運動を觀測しているわけである。あるいはそのような微視的な價格運動の、いわば社會的平均としての巨視的な價格運動を、觀測しているといつてもよいであろう。この場合には觀測對象は、微視的な個別經濟に關するかぎりの個々の價格變化ではなく、それらの總計としての市場價格決定の機構そのものの、巨視的な運動である、ということになるであろう。

この事態は、丁度湯の溫度を測定するために湯の中に寒暖計を挿入する操作に、對比することができるであろう。この場合觀測者は、寒暖計の水銀溜の附近の水の溫度を測定しているわけであるから、觀察される對象は水であり、寒暖計が觀測装置である。しかしわれわれは、このことをさらに立入って、次の如くにも考えることができるであろう。水銀は、溫度に應じて膨脹しまたは收縮する。それに伴つて水銀柱の高さは變化するわけであるから、このような現象を觀測者がみているといつてもよい。この場合には、寒暖計自體も觀測の對象となり、寒暖計によつて散亂される光を觀測の手段に使っている、ということになる。そこでこの例が示す連鎖をもう一度逆にたどって、寒暖計が水銀溜の附近の水の溫度を測定するとみる場合にかえると、測定者は、寒暖計を先端とし光

3) W. M. Persons: Review of economic statistics. Preliminary volume 1. 1919. や W. C. Mitchell: Business cycles: The problem and its setting. 1928. など始まる諸々の景氣研究書をみよ。

4) O. Anderson: Die Korrelationsrechnung in der Konjunktur for schung. 1929, G. Tintner: The variate difference method. 1940. 等が提唱する『變差法』は、この問題の研究に一步を進めている。なお T. Haavelmo: Probability approach in econometrics. *Econometrica*. 1944. Supplement. を参照せよ。

を経て観測者の眼に至る、一連の観測装置を使って、いわばこのような一連の装置から成る、広い意味の寒暖計を水の中に挿込んで、この広い意味の寒暖計の先端、すなわち狭い意味の寒暖計の水銀溜を水に接觸させ、そうすることによって水の温度を測定した、ということになるわけである。丁度このような広い意味の寒暖計にあたるものが、われわれの問題としている 価格調査の場合には、研究室にいる統計計算係から始まって個々の交換者に至る、一連の人的および物的な観測装置である。測定者としての経済学者は、いわばそのような大きな観測装置を経済社会に挿込んで、この観測装置の先端にある個々の交換者の交換行為を基因とする市場価格の運動を、観測しているわけである。

この一つの例から、次のことが判かるであろう。およそ観測の対象と観測の装置との間には密接な相互関係があって、ある角度からみれば観測の対象であったものが、他の角度からみれば観測の装置ともなる。観測の装置を、研究室内で書かれた物價表をみている経済学者の眼であるとすれば、観測の対象は、その物價表から始まって日銀調査局や商社を経て現實の賣買を行う人の取引行為に及び、進んではそのような取引行為の結果生ずる市場価格の現實の運動をも含むであろう。

観測者たる経済学者は、價格表以前の現實の測定行為やその基礎にある現實の交換行為の成果としての諸價格の運動が、すべて一枚の價格表の中に正確に表現されているものと考えれば、かれは、ジグザク・コースを描く物價表上の時系列に統計解析を施して、ある一定の時には價格は如何に變動したかということ、確定することができるであろう。この場合には、物價表を解析して得られた研究成果が、とりもなおさず、かれの観測結果となるわけである。この意味においては、かれの観測は物價表上の研究だけに止まって、その背後にある社會の實際の動きには及ばなくてもよいであろう。

しかしそれは、物價表上の數字が社會の實際の價格運動を正確に表現している場合にかぎる。もし統計數字に誤差が含まれていれば、そのような

數字の集團としての物價表だけに頼ることはできない。かれはどうしても遡って、その統計數字の背後にある現實の價格運動と物價表上の統計數値の動きとの對應關係を、調べてみなければならなくなる。日銀の價格調査の方法に誤りがないかどうか、また日銀に報告している商社の原報告に誤りがないかどうか、もし統計調査や集計の過程において誤差が発生する可能性があるとして、その誤差は完全に誤差法則にしたがうものであるかどうか、このような事情を調べてみなければならぬ。

もっともこのような誤差は、統計調査の機關が整備されるにつれて、次第に極小化される性質のものである、とみてよいかもしい。しかるかぎりにおいては、原理上誤差はないものといってよいであろう。

しかしさらに進んで、價格報告そのものと現實の價格關係との對應關係になると、物事はそれほど簡單ではないであろう。商社の報告は、社會における賣買行為の成果をすべて観察した結果ではなく、そのうちの一部、恐らくは少數の『標本』を観察しただけであろう。この標本が、如何なる意味において、母集團の現實の動きの真相をとらえているか、ということについての立入った検討が必要であろう。最近の推測統計學上の進歩した諸研究は、このような問題にかかわるものなのである。

およそこのような問題までも經濟的測定の問題としてみれば、單に物價表の統計解析を行うというような、いわば統計技術的に解釋することのできない、もっと本質的な問題の出し方が、必要となってくる。この場合經濟的測定の本質は、さきに述べたような広い意味の社會的測定装置——現實に交換している個々の交換者から始まって、報告を作成する商社やその報告を整理する日銀調査局、およびこの日銀調査局から送られた研究室備付けの統計表を整理して統計計算を行っている計算係に至る、一連の人的および物的な測定機構——を使い、その先端にある個々の交換者の交換行為の結果として經濟諸量の間にかかる變化を、観測しているといつてよいであろう。この場合、かれの観測は微視的観測となるであろう。あるいは

これらの交換者の社會的總實踐の總合結果として、價格が形成される社會經濟過程を觀測分析する、と考へてもよいであろう。この場合には、かれの觀測は巨視的觀測となるであろう。さらには、以上のように觀測裝置を廣く考へないで、逆に觀測對象の範圍を擴張し、單に市場價格の變動だけではなく、個々の交換者から商社・日銀調査局・統計計算係を経て物價表の解析結果までも一體として、觀測對象の中に含ませ、經濟學者の眼を觀測裝置とみることもできるであろう。

しかしいずれにしても、研究室内の經濟學者の行ふ價格測定行爲と、商社や日銀調査局のような統計調査の實施者と、社會經濟的な實體的な價格決定機構とを、機械的に分離抽象して考へることは、このような單純な例からしても、事態をあまりにも單純化したことになるのであって、われわれは、價格の測定對象および測定裝置を總括的に考へるのでなければ、經濟的測定の本質を逸することとならざるを得ないであろう。

Ⅲ 理論經濟學と計量經濟學

以上論じたところからして、われわれは二つの新しい問題を展開する緒口を得るであろう。その一つは、計量經濟學と理論經濟學との關係の問題である。

經濟學者の中には、理論經濟學と經濟統計學と計量經濟學とを機械的に分離並置し、價格決定機構に關する抽象的研究が理論經濟學者の任務であり、價格測定の方法を研究するのが經濟統計學者の任務である、そして計量經濟學者の任務は、統計學の助けをかりて得られた數字をもって、抽象的數量的な經濟理論を具體的に檢證することにすぎない、と考へるものがある。しかしこのような考へ方は、價格の測定ということをもって、價格決定機構を外から眺め、市場できまつた價格をあとからあとづけて、いわば統計技術的に價格運動を表示し計算することにすぎない、とする考へ方にほかならないのであって、前節で述べたような價格測定機構全體の中のひとこまひとこまを、分離抽象する誤りに陥っている。

フリッシュ⁵⁾は、一般經濟理論の形成、理論の

數學的定式化およびその結果の統計的檢證は、いずれも計量經濟學を構成する三つの局面であつて、そのうちの一つだけを取りだしてこれを計量經濟學であるといつてはならない、計量經濟學は經濟統計學とは決して同じではないし、また一般經濟理論の著しい部分は嚴格に數學的性質をもつけれども、それだけでは計量經濟學ではない、また計量經濟學は數學の經濟學への應用と同義でもない、統計學と經濟理論と數學とは密接に結合されて始めて計量經濟學となる、といつているが、このフリッシュの見解は、恐らく以上に展開したような論理の上に立っている、といつてよいであろう。

われわれは、すでに上に暗示しておいたように、そしてまた次節でさらに論及する如く、價格の測定をもって實踐的な行爲である、と考へるものであるが、それは單に、實踐的經驗論をとる學者の立場からみてそうである、といふには止まらない。パレート流の機械的經驗論の立場からみても、實はそうならざるを得ないのである。パレートの選擇理論からしても、觀測可能な抽象的な世界と現實に觀測された具體的な世界とが、絶對的に對立した二つの別の世界である、と考へることは、一般には必ずしも成立しない不徹底な考へ方なのである。パレート流の機械的經驗論をあくまで貫いてみるならば、物理學におけるマッハ主義者と同じように、自然は——第二の自然たる社會もそうであるが——經驗的に測定されて始めて科學の對象の中に入ってくる、といわなければならない。したがつて觀測可能な抽象的な世界が、現實に觀測された具體的な世界以外にあると考へることは、實は形而上學への危險を藏するものなのである。觀測から獨立な絶對的客觀的な世界があつて、それが自然法則または第二の自然法則たる社會法則にしたがつて動いている、理論經濟學者はそれを例へば理性の力によつて知ることができ、このようにして知られた法則を計量經濟學者が統計的に檢證してみる、といふのではなく、およそ經濟學者が經驗的に測定して得た統計的な數量關

5) R. Frisch: Editorial. *Econometrica*. 1933.

係を整理してみた結果が、理論的數量關係としての經濟法則である、といわなければならないであろう。いわゆる『操作主義』というものの本當の意味はそこにある、といつてよいであろう。

經驗科學としての經濟學にとっては、經驗的にとらえることのできる市場價格の世界だけが存在するのであって、この市場價格の世界の背後に何か價值の世界ともいふべきものがあると考えるのは、形而上學に陥るものである、というローザンヌ學派流の考え方⁶⁾を徹底すれば、現實の觀測から獨立な絶對的客觀的な經濟世界の存在を想定することは、やはり形而上學的な態度として排斥しなければならないはずである。計量經濟學者が經驗的統計的に確定した數量關係——またはこれに加えて、統計が整備され数理統計學が発達すれば、當然に經驗的統計的に確定し得るものと、少くとも『思考實驗的に』證明することのできる數量關係——だけが、經驗科學としての經濟學の前提し得る數量關係である、といわなければならないのである。したがって、このような考え方からすれば、計量經濟學以外に理論經濟學がある、と考えるべきではなく、計量經濟學がすなわち理論經濟學である、といわなければならないであろう。シュムペーター⁷⁾は、如何なる經濟學者も、經濟學の數量的な分野を取扱うかぎり、かれが欲すると欲せざるとにかかわらず、一個の計量經濟學者である、といっているが、このシュムペーターの言葉は、このように解釋することができるであろう。ローザンヌ學派の經濟學者としてのシュムペーターは、その經驗主義を貫くかぎり、當然にそのように考えざるを得なかつたのである。

IV 經濟的測定の實踐的性格

われわれは上に、價格の測定は實踐的な行爲であるといつたが、この事情は自由經濟時代より統制經濟時代に入るにつれて、さらにはっきりと明かになる。⁸⁾この點が、經濟的測定の本質に關す

6) V. Pareto: Manuel d'économie politique. 1909. Ch. III. §§ 225-228. 参照。なお拙著『近代經濟學の基本性格』19頁以下参照。

7) J. Schumpeter: The commonsense of econometrics. *Econometrica*. 1933.

るわれわれの結論の暗示する第二の問題である。

われわれはこの問題を、フリッシュが『反作用研究』(repercussion studies)と呼ぶ計量經濟學的研究の新しい分野に關連させて、説明してみよう。ここにフリッシュが『反作用研究』といつていところのものは、ある一定の政策、例えば財政政策や貸銀政策などが一定の經濟體系の内部で施行されたとき、そこに何が起るかということを検出しようとする、計量經濟學的研究の新しい分野であるが、それは、すでに十數年前からオスロの經濟學大學院で進行中の國民豫算の研究作業で、1945年大藏省が大規模に取上げて以來ノールウェーの全經濟政策の上に大きな役割を占めるようになった計畫であつて、われわれはそれについてのフリッシュの簡単な報告⁹⁾をもっている。

この研究のもっとも重要な理論上の特色は、『國民豫算の作業』における種々の變數を結合するところの、『構造的關係』(structural relations)を分析することであつて、國民豫算の作業そのものは、その中に含まれた變數が動く場を設定するにすぎないのである。そこでもっとも重要な問題は、變數相互間の依存關係を規定するこの『構造的關係』である、とフリッシュは考える。例えば政府が一定量の通貨を經濟體系の中に投入したとき、一定商品の消費および價格は如何に變化するか、一定消費者集團の所得は如何に變化するか、企業の期待は如何に變化してそれが投資活動に如何なる影響を及ぼすか、乗數効果と加速度効果との關係如何、というが如き諸問題の研究がこれであつて、すでに四十餘年前にウィクセルが廣い範圍

8) この實踐的性格は、自由經濟時代および統制經濟時代を通じて原理的にみられるところであるが、自由經濟時代においてはそれにもかかわらず、經濟構造が等質的であるために、實際上マーシャル的な『平均太陽的』價值測定論が成立つ。しかし異質的經濟構造をもって特色づけられる統制經濟時代には、價值測定の實踐的性格は、原理上も實際上もこれを除くことができない。詳しくは、前掲拙著『基本性格』75-84頁参照。

9) R. Frisch: Repercussion studies at Oslo, communications. *American economic review*. 1948. なおこの論文については、中山伊知郎『經濟學者の現世代』(經濟學研究會編『經濟學』一九四九年所載)に比較的詳しい紹介がある。

にわたって開始し、最近ケインズの『一般理論』やフリッシュ自身の『波及の問題および衝撃の問題』¹⁰⁾が新しい分析用具を使って継承したところのものである。

フリッシュは、このような構造的関係を中心として反作用研究を行おうとするのであるが、この反作用研究が有効に行われるためには、第一にこの関係がいわば数學的に偏微分可能でなければならない。すなわち全體の變数が、問題とする二つの變数を除いてすべて變化せず、この二つだけがたがいに影響しあいながら變動するという可能性を、現實に作出さなければならない。第二には、それぞれの構造的關係を示す多くの方程式について、それらが如何なる程度に『自律的』(autonomous)であるかを、考慮することができなければならない。ここにフリッシュが自律的關係というのは、構造的關係を表現する特定の方程式に含まれている變數と同一の變數を含む他の諸方程式は、技術や制度や個々人の行動の方向が變化したり、體系中に含まれている特定の變數が經濟政策によって固定されたりした結果として、その妥當性を失うことがあるとも、この特定の方程式だけはその妥當性を失わないような場合に、始めて存在する關係である。

自律性の程度は、勿論、具體的な事情によってそれぞれ異なるものではあろう。しかしこの自律性こそは、經濟量間の偶然的な共變關係とは異なる因果關係を發見し得べき、唯一の經驗的な手がかりであり、したがって政策の立場から極めて重要な役割を演ずるものとなる。そして自律性の程度は、これを數量的に考慮し得るとき『自律性係數』と呼ぶことができるが、この係數は確率の性質と非常によく似た性質をもっており、ある意味においては、問題とする關係が他の諸方程式の全部または一部の存否にかかわらず存立する確率である、と考へてもよいであろう。そしてかくの如き確率の一定水準を確保するに必要な假定の幅が小なれば小なるほど、問題とする方程式の自律性は

大となるのである。

このような意味をもつ自律性係數は、計畫經濟においても自由經濟においても重要なものであるが、とくに計畫經濟にあつては、かくの如き自律性係數を通じて一定の政策手段の具體的な經濟效果を知ることができるから、自律性係數を具體的に計算することができれば、計畫經濟の推進に非常に役立つことは明かであろう。フリッシュはそこに、計量經濟學者が自國の政府や國際連合に對して奉仕し得べき、新たな活動分野があることを暗示して、この『オスロー大學における反作用研究』の報告を終るのであるが、このオスロー大學における研究が果して如何なる程度にまでノールウェーの『計畫經濟』に役立つかということの検討¹¹⁾は、ここでは差控えておこう。ここで問題としたいことは、このフリッシュの報告が、われわれの當面の問題たる經濟的測定の本質に對して與える、原理上の示唆である。

上述の如く、もし自律的な關係が計量經濟學的に確定されるならば、政策主體はその成果を検討することによって、果して始め豫期したような結果が、現實に經濟體系の反作用を通じて實現されるかどうか、もし完全に實現されないとするならば、その實現の確率はおよそ如何なる程度であるかというようなことを、明かにすることができるであろう。

例えば一定の貨幣量を産業界に投入するとき、この通貨政策の結果として物價體系や貨幣價值は變化するであろうが、そのような變化にもかかわらず、結局落付く先の物價水準は如何なる高さであり、貨幣價值は幾何となるかということを、政策當局は豫め豫定しているわけであろう。この場合、政策主體はそのような政策を施行するにあたり經濟的測定を行うのであるが、その際政策の效果を大ならしめるためにも、また測定の能率を高めるためにも、もっとも自律性の高い構造的關係を決定する必要にせまられるであろう。そしてそのためには、單に經濟社會の動きを受身の立場で

10) R. Frisch: Propagation problems and impulse problems in dynamic economics, in *Economic essays in honour of Gustav Cassel*. 1933.

11) この計畫の政策上の實績については、L. R. Klein: *Planned economy in Norway*. *American economic review*. 1948. も批評しているように、相當な疑問がある。

観測するだけでは、ごく特殊な場合を除き、所期の効果をあげることにはできないのであって、政策主体は、他の事情が変化しないような条件の下に、物價および貨幣價值につき特定の自律性の高い構造的關係を創りだし、この環境において經濟的測定を行おうとすれば、かれは當然に、測定の結果が豫想どおり實現されるような價格決定機構を、能動的に創りだそうと努力するわけである（一定の通貨管理、恐らくは産業管理にまで進むであろう）。したがってこの場合、價格の測定と價格の決定とは、當然に、政策上密接に融合され分離すべからざる關係におかれることとなるであろう。

われわれは、さきに經濟的測定のプロセスを分析するにあたり、研究室の中の經濟學者が、日銀調

査局から始まって現實に交換している個々の交換者までを含むところの、尨大な測定装置を使って經濟的測定を行う、という事情を述べたが、いまわれわれが述べている統制經濟の場合には、むしろ、前に測定装置の末端にあったところの交換者の一人——すなわちこの場合は國家——が、極めて大きな力をもった價格決定機構の管理者となり、この價格決定機構の管理者が、價格の決定と價格の測定とを同時に行い、經濟學者は逆に、そのような價格の測定兼決定者の單なる技術顧問となる。したがってこの場合には、經濟的測定そのものの實踐的性格は極めて明確であり、價格の決定と測定とは、概念上も實際上也、分離すべからざる關係に立つこととなるのである。